

「世界農業遺産 琵琶湖システム」の概要

世界農業遺産 琵琶湖システムは、水田営農と深く関わりながら発展してきた伝統的な内水面漁業を中心とするシステムです。その基盤には、暮らしや生業の中で資源を保全管理する伝統的で社会的な仕組みがあります。また、琵琶湖システムは農業と漁業の複合的な営みにより、1,000 年以上にわたって受け継がれてきたシステムであり、都市化が進む地域においても、持続的な資源利用を受け継いできています。

(C 展示室、水族展示室)

琵琶湖は、日本の古都・京都の近くに位置し、16 の固有種を含む約 60 種類の在来の魚を育てています。同時に下流の大都市圏の住民を含む 1,450 万人の水源であり、琵琶湖の水質や生態系の保全は大切な責務です。湖の保全に寄与するものにはヨシ保全 や環境配慮型農業、水源林の保全があります。ヨシ帯は資源として利用されてきただけでなく、多様な生き物の生息環境としても大切な役割を果たしてきました。また、水田営農では、ニゴロブナ等の湖魚が氾濫原の代わりとして、湖辺の低湿地に開発された水田に自ら遡上し、産卵・初期成育の場として利用してきました。さらに、緑化された水源林は洪水や渇水の防止に寄与し、それが、琵琶湖から河川に遡上する湖魚の成育環境の保全にもつながっています。



(B 展示室、屋外展示)

歴史的には、滋賀の人々は、遡上する湖魚を農作業の傍らで捕獲する様々な待ち受け型の漁法を発達させ、食料自給の安定性を高める半農半漁のライフスタイルを築いてきました。漁法の代表格は、未成熟魚を捕らえない漁獲が可能なエリ漁です。エリとは水流や魚の生態を巧みに利用する伝統的な漁法で、このエリは水田とともに、独特のランドスケープ・レイクスケープを形作っています。滋賀の人々はこうした中で、資源を保全管理する仕組みを築いてきました。

20 世紀後半の経済発展の中で、このシステムは、人口増や都市化、農業の近代化、外来魚による食害など、様々な課題に直面してきました。しかし、1970 年代以降、漁業者のみならず、農業者や林業者、消費者など多様な主体が連携し、課題に対峙してきました。そのような中で、琵琶湖の富栄養化防止に向けた市民運動により条例が制定され、湖魚が産卵できる水田・水路の環境を保全する取組も行われるようになりました。こうした多様な主体の協働は、ソーシャル・キャピタルの形成にもつながっています。

なお、滋賀県では、さらに、地球上の水の 0.5%以下と言われる利用可能な淡水資源の保全に向け、学術研究を進めるとともに、国際会議の開催や、海外からの研修受け入れ等を行っています。これらの努力は、経済、社会、環境の調和を目指す取組であり、このシステムの価値の認識、伝承、共有につながっています。



図1 琵琶湖システム イメージ図

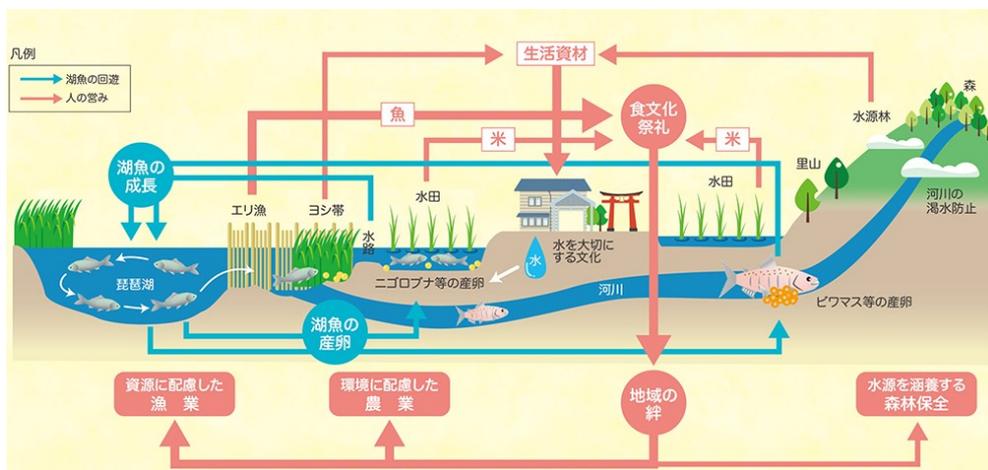


図2 琵琶湖システム メカニズム

※図1、図2: 「滋賀県 > 琵琶湖システム > 学ぶ > STEP1 琵琶湖システムとは?」
[\(https://www.pref.shiga.lg.jp/biwako-system/study/step1/\)](https://www.pref.shiga.lg.jp/biwako-system/study/step1/)よりダウンロードした図に加筆